

2003（平成15）年11月6日

やおみなみ 八尾南遺跡（その2）現地公開資料

財団法人 大阪府文化財センター

◆遺跡の位置とこれまでの調査

財団法人大阪府文化財センターでは、国土交通省近畿地方整備局 大和川河川事務所の委託を受け、大和川改修（高規格堤防）事業に伴う八尾南遺跡の発掘調査を2002年度より実施しています。

八尾南遺跡は、八尾市城南西部の八尾市西木の本1～4丁目、若林町1～3丁目にまたがる南北約1.5km、東西約0.5kmの範囲を有し、今回の調査地は遺跡範囲の南端に位置します。また、本遺跡の周囲には、西側に長原遺跡（大阪市）、北東側に木の本遺跡（八尾市）、東側に太田遺跡（八尾市）がそれぞれ隣接して分布しています。

本遺跡は、1976年に八尾市教育委員会が行った大阪市営地下鉄谷町線の延伸工事に先立つ試掘調査により確認され、1978～79年には、八尾南遺跡調査会によって「八尾南駅」駅舎ならびに検車場建設予定地を対象とした本調査が行われました。36,000㎡に及ぶ広範囲を対象としたこの調査では、古墳時代初頭～中期の居住域・墓域・生産域が確認されたほか、旧石器時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出され、本遺跡が旧石器時代～中世の複合遺跡であることが明らかとなりました。

その後、この地域では区画整理事業が行われた駅南部を中心に開発が進行し、これに伴って約40件の発掘調査が、（財）八尾市文化財調査研究会（以下、研究会と略）を中心に八尾市教育委員会、大阪府教育委員会によって実施されています。今回の調査地におきましても、事業計画前まで所在していた（株）コクヨ物流関西配達センターの倉庫建設に伴い、1983年に研究会によって約2,600㎡の調査（1次）が行われています。この調査では、弥生時代後期の周溝墓12基と5世紀後半～末の方墳3基が検出され、調査地一帯が弥生時代後期～古墳時代中期を通じて墓域として土地利用が行われていたことが示されました。

◆2002年度の調査概要

2002年度は、事業予定地内の西側1/3にあたる3,180㎡を対象に発掘調査を実施しました（02-1工区）。その結果、平安時代終り頃の耕作面（第1面）、弥生時代末～古墳時代初頭の墓域（第2面）、竪穴・掘立柱建物を伴う弥生時代後期の居住域と水田域（第3面）、弥生時代前期（～中期初？）の小区画水田（第4面）、の計4面の遺構面が確認されました。

引き続き今年度は、東側の2/3弱にあたる4,850㎡を対象に調査を進めています。すでに調査を終えた1トレンチの第3面では、前年度に確認した居住域とは流路によって隔てられた別の微高地が確認され、その上では新たに竪穴建物1棟が検出されました。

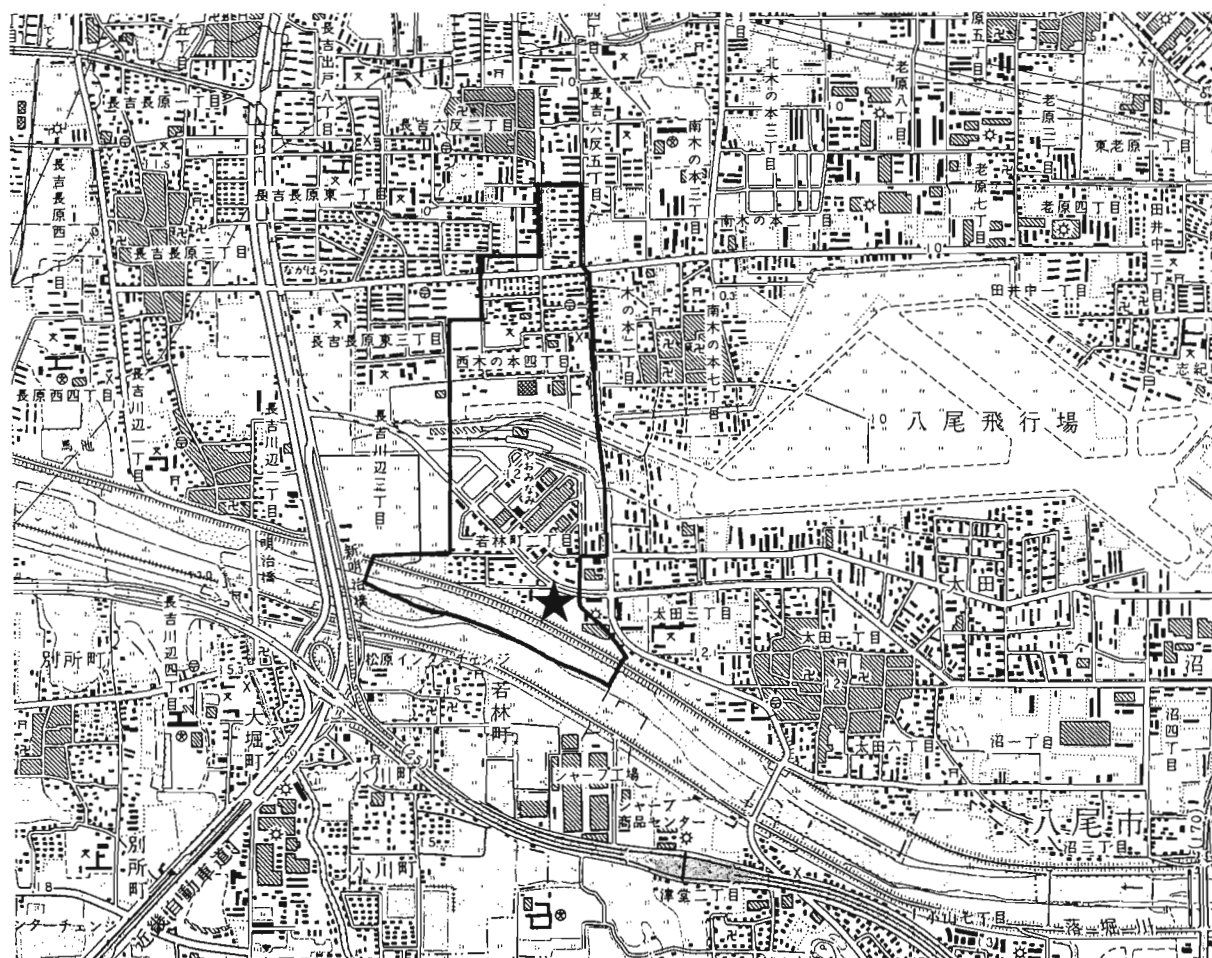
◆周溝墓群の検出

第2面と呼称している遺構面では、2002年度調査で15基（研究会検出分含む、ただし方墳とされる3基は除外）、今年度は現時点までで新たに14基（うち1基は研究会検出分）の周溝墓が確認され、研究会の調査所見のとおり、調査地周辺が一大墓域であったことが確実となりました。この墓域は、未調査部分や研究会検出分の残り（5基）、攪乱や地盤改良などで失われたものを含めれば、おそらく40基を超える周溝墓から構成されていたものと考えられます。

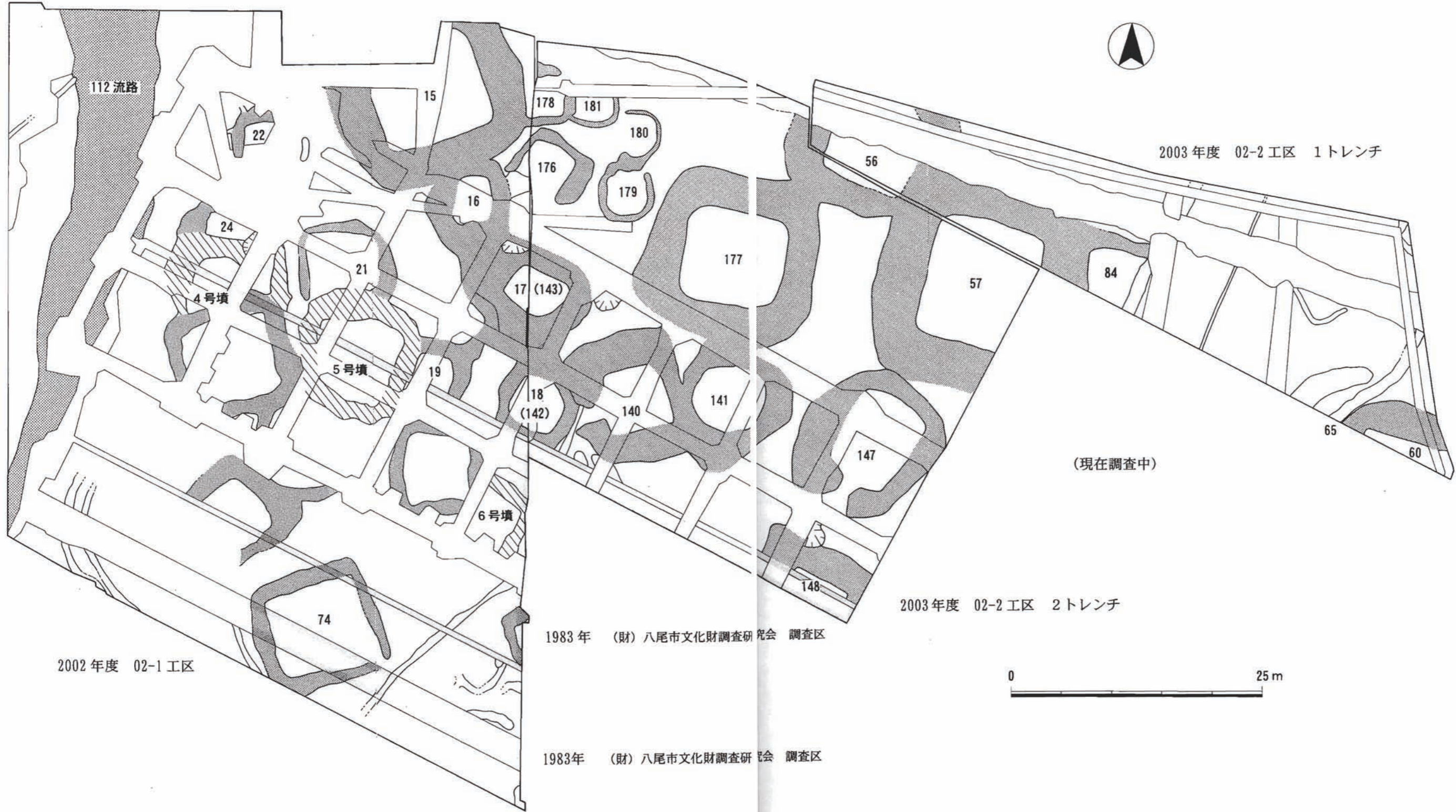
これまでに検出されている周溝墓は、墳丘部分の形状が方形のもの、不整な長方形のもの、円形に近いものがあり、規模は一辺あるいは径が12m～4mまで大小のものが存在します。周囲に溝をきちんと巡らせ、明確に方形を呈する墓は6m以上の規模を有するのに対し、溝が完全に巡らず、墳丘部が不整な形状となるものは5m以下の小型の墓が多いようです。また、一辺の中央部に開口部（陸橋）を有し、この周囲の周溝が拡張あるいは屈曲する前方後方形のもの（赤塚次郎氏分類BⅡ類）が2基存在します。

埋葬施設を確認するための精査は今後実施する予定ですが、昨年度検出分では確認できませんでした。

なお、これらの周溝墓の築造時期に関しましては、現時点では弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えていますが、本格的な遺物整理が未着手の段階にあり、各墓の詳細な時期や築造順などは今後の課題です。



八尾南遺跡位置図（S = 1 : 25,000）



2002年度 02-1工区

1983年 (財)八尾市文化財調査研究会 調査区

2003年度 02-2工区 2トレンチ

1983年 (財)八尾市文化財調査研究会 調査区

(現在調査中)



八尾南遺跡 第2面 遺構分布概略図